

# さくらそう通信



## にしようき ましょうがっこう さくらそうとともに—東京都北区立西浮間小学校

ここ数年、さくらそうをシンボルとする自治体の紹介を連載してきましたが、今回は学校でのさくらそう栽培を通じて情操教育を実施している東京都北区立西浮間小学校に、活動の様子を紹介していただきました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

本校は、東京都北区浮間に所在し、東京都と埼玉県の境を流れる荒川に近接し、川向こうは戸田市という位置です。開校は昭和34年（1959年）10月。創立49年目を迎えます。学校の目の前はJR浮間舟渡駅で、埼京線・新幹線が通ります。現在児童数607名。平成21年4月から、学区内浮間2丁目荒川沿いに新築移転を予定しています。



▲全校児童が育てたさくらそうの鉢が正門入り口に展示されます

### 東京都北区立西浮間小学校紹介

北区浮間2丁目17番1号（平成21年度から）  
昭和33年9月1日開校  
校長 木村 良平 先生

### ▼平成21年4月からの西浮間小学校



## ■浮間ヶ原のさくらそう

浮間の「日本さくらそう」が全国的に知られるようになったのは、今から300年以上前にさかのぼります。

徳川幕府の初期、徳川家康は浮間ヶ原で鷹狩りをしていました。その折、広い荒川の河原一面に生い茂る雑草の中に、ひっそりと咲くさくらそうの可憐さに心惹かれて持ち帰り、鑑賞したのが始まりと言われるそうです。江戸時代の浮間ヶ原は、まるで絨毯を敷きつめたようにさくらそうが咲いたので、春になると荒川の土手は花見客で大

いに賑わったこともあったそうです。

ところが、昭和初期（1930年代）頃、浮間のさくらそうが減少し始めます。大きな原因は、洪水を防ぐために行った荒川の改修、堤防工事による環境の変化でした。野生のさくらそうが生き続けていくためには、洪水などで上流から運ばれてくる栄養分豊かな土と、洪水の勢いでさくらそうの芽をちょうど良い深さに埋めてくれることが必要でした。しかし、改修工事により流れが変わり洪水もなくなり、自生する環境が大きく変化したのです。

さらに、浮間の土が建物の壁の材料として良い品質だ

ったので、大規模に採取されるようになり、工場や家が増えていき、わずかに残っていた浮間のサクラソウは、絶滅寸前の状態に追い込まれました。

こうした中、江戸時代から人々に愛されてきた由緒あるサクラソウを何とか保存しようという声が地元の人々の間に高まり、昭和37年浮間桜草保存会が結成されました。絶滅の危機にあったサクラソウでしたが、保存会の人々の心をこめた栽培作業によって、都立浮間公園横の圃場を中心に、大切に育てられています。

## ■西浮間小学校の取り組み



▲20年以上「さくらそうまつり」を実施してきた西浮間小学校の正門（平成20年度末で移転）

郷土浮間を象徴するサクラソウの栽培を通して、本校では生命を大切にする教育、思いやりの心を育てる教育、郷土を愛する教育を意図し、全校児童が一人一鉢栽培に取り組んでいます。この活動は昭和59年度に始まり、平成21年度で25周年を迎えます。この間、本校の特色ある教育活動として定着し、保護者や地域の方々からの声援、保存会の方々からの栽培に係わる指導・助言をいただいています。

春。毎年サクラソウの開花を祝って『さくらそうまつり』を開催します。全校で「さくら草の歌」を歌ったり、大切に育てていこうというメッセージの出しものを披露したり、地域の方々とともに楽しむ会です。全校児童分の約600鉢は、正門入り口に展示されます。北区の圃場にも代表児童の花が出品されます。やがて、花の時期が



▲全校生徒が参加する「さくらそうまつり」

終わると土を増し、肥料を与えます【増し土、お礼肥】。

夏。暑さと乾燥に弱いサクラソウにとって、厳しい季節です。西日を避けるために草簾を張り、水やりも1日2回にします。また、雑草をこまめに取ります。これらの仕事は一人一人が自分の鉢を世話していきます。夏休みには、栽培委員会の児童が一所懸命世話します。

秋。来年きれいな花が咲くように古根を取り除き、土の中で育った花芽を一つずつつける【芽分けの会】を全校で開きます【芽分け】。新しい花芽の植え替え作業は、毎年6年生を中心に行い、サクラソウの栽培方法を継承していきます。保存会やPTAのご協力が大きな支えです。



▲サクラソウの鉢植えの準備の様子▼



冬。サクラソウは寒さに強い花です。この季節は、水やりを気をつけながら暖かな春を待ちます。

児童一人一人が6年間、サクラソウを育てる体験を得ることで、自然や地域を愛する心が深まっています。豊かな情操の育成を願い、浮間桜草保存会やPTAの方々のご支援ご協力をいただきながら、今後も大切に育てていきたいと思えます。

### ♪「さくら草の歌」－さくら草栽培10周年記念歌♪

作詞 猿渡正則 作曲 磯貝敬智

- |  |  |
|--|--|
| 1 春風そよぐ 野原に<br>きらめく花 さくら草<br>赤、白、ピンク、うす紫<br>色さまざまなさくら草<br>冬の寒さが つらいので<br>春のよろこび 大きいね | 2 春風そよぐ この丘に<br>かがやく花 さくら草<br>赤、白、ピンク、うす紫<br>色あざやかなさくら草<br>空から春雨 ふるときに<br>冬の寒さを 思い出す |
|--|--|

## 田島ヶ原のノウルシ

さいたま市文化財調査専門員 磯田 洋二



4月中旬、サクラソウの花が咲き揃った田島ヶ原は大勢の人々にぎわいます。そうした時、「サクラソウはどこにあるの。」と、お目当てのサクラソウを探して右往左往する人をよく見かけます。聞けば、一面にサクラソウの花で覆われていると思っていたのだとか。また、ノウルシで黄色く染まった田島ヶ原を、「まるで菜の花畑みたいだ。」という人も多い。そして、「いっぱいある黄色いのがサクラソウかい。」とたずねるので、ノウルシですと答え、「サクラソウがかわいそうだから、ノウルシを抜いてしまえ。」とおっしゃる。

大正5年(1916年)4月に田島ヶ原を調査された史蹟名勝天然記念物調査会委員の三好學博士が、「春の頃、原一面がサクラソウの紅花に混じって黄色のノウルシ、紫色と白のスマレ、紫色のチョウジソウ、紅紫色のムラサキケマン・ヤブエンゴサク、黄金色のヒキノカサなどの花が咲き、天然の花園のように大変に美しい眺めになる。」と述べているように、その昔から、田島ヶ原ではサクラソウの紅色とノウルシの黄色が織りなす景観が見られたのです。

今から50年ほど前の事です。第二次世界大戦に敗れた国内では食糧が不足して、人々は道の片側半分・公園・校庭などを畑にして、不足する食糧を補いました。この時、田島ヶ原も約70%の土地が畑になったのです。昭和37年(1962年)に田島ヶ原が市の財産になって畑はなくなり、ここから今の田島ヶ原の姿に復活したのです。

復活のようすを振り返ると、ノウルシが少なかった時には、増えろ増えろと声援したものです。やがて、ノウルシとサクラソウの群落広がって、花の時期には黄色と紅色の縞模様で花園のように美しく見えました。その後ノウルシの群落は増え続けて、サクラソウの群落を覆い隠すほどになり、ノウルシの黄色ばかりが目立ってサクラソウの紅色が少ない現在の姿になったのです。



▲一面ノウルシ群落になった田島ヶ原

ノウルシが田島ヶ原を覆い尽くすほど増えたのは、次の3つの理由によります。第1は、湿生植物のノウルシにとって、田島ヶ原は低湿地なので生育に適していること。第2は、春植物のサクラソウを保護するための管理が、同じ春植物のノウルシの生育を助けていること。第3に、ノウルシは地下茎と種子によって盛んに繁殖し、ほとんど天敵がないことです。

このように繁殖が著しいと、他の植物、特にサクラソウに影響が出るのではないかと心配です。サクラソウとノウルシの生育のようすを比べると、出芽してから地上部が枯れるまでの過ごし方は、両方とも春植物なのでよく似ています。似ている植物が出会うと場所取り合戦が始まるのです。植物は動物のように食いついたり取っ組み合ったりはしませんが、いろいろな方法を使って戦います。サクラソウとノウルシは、草丈を伸ばし葉っぱを広げて太陽の光を奪い合う方法で戦います。この戦いでは草丈の高いノウルシが草丈の低いサクラソウの上にかぶさって、光を独り占めしてサクラソウに勝ちます。(図1)

地中では地下茎や根っこで相手を押り返す方法で戦います。この戦いでは地中に数年間は残る太くて長い地下茎をつくるノウルシが、毎年細くて短い地下茎をつくるサクラソウを押し戻してサクラソウに勝ちます。(図2)

このように、地上と地下の戦いでサクラソウに勝ってしまうノウルシを取り除けば、サクラソウを救えるのでしょうか。ノウルシを取り除くと、その跡に帰化植物のセイタカアワダチソウなどが生えてきて、田島ヶ原の植生が変化してしまうのです。現在は、植生の変化を起こさずに、ノウルシの繁殖を抑える方法を探しています。

なお、田島ヶ原では増え過ぎが問題のノウルシも、埼玉県や国では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている希少植物なのです。

図1 地上の戦い

ノウルシとサクラソウは日光を奪い合って戦います

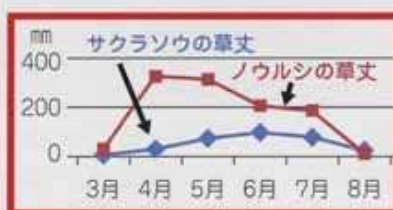


図2 地中の戦い



0 50 100(mm)

ノウルシとサクラソウは地下茎で押し合って戦います

## 『レッドデータブック』のサクラソウの絶滅危惧度が低下 —田島ケ原の株数は減少—

『レッドデータブック』とは、絶滅の恐れのある野生生物について記載したデータブックのことで、昭和41年に国際自然保護連合が中心となって作成されたのが初めて、現在では各国や団体等が多く編集しています。

さて、この『レッドデータブック』では絶滅危惧度の高い順に、「絶滅 (EX)」「野生絶滅 (EW)」「絶滅危惧 I A (CR)」「絶滅危惧 I B (EN)」「絶滅危惧 II (VU)」「準絶滅危惧 (NT)」「情報不足 (DD)」というカテゴリーがあります。サクラソウは、平成19年8月のリスト改定に伴い、保全のための努力が払われた結果、絶滅の危険性が下がったとして、それまでの「絶滅危惧 II」から「準絶滅危惧」に分類されるようになりました。

これは、日本全国のサクラソウの危惧度ということになります。それでは、田島ケ原のサクラソウはどうなっているのでしょうか。

田島ケ原では、毎年開花期に生育株数と開花株数の調査をしています。第1次と第2次指定地の中に、10m×10mの永久調査枠を11ヶ所設置し、昭和40年からその調査を実施しています。その推移はというと、昭和45年頃から平成に入るまでは調査開始時の数値を下回る状態が続いていましたが、その後増加に転じ、平成20年春の調査では、昭和40年を100とした場合に、生育株数で164.2、開花株数で260.1という結果が出ています。つまり、調査開始時に比して、大きく増加していること



▲調査枠をさらに細分した、1m×1mのメッシュの様子

になります。しかしながら、前年の調査と比べると、生育株数で8.07、開花株数で0.43のそれぞれ減となり、必ずしも右肩上がりというわけにはいきません。むしろ近年は、右肩下がりの傾向にあります。

田島ケ原では、昨年度からオギ・ヨシの草焼きを再開しています。これは、一つにはオギ・ヨシの持つ栄養分を自生地に戻してあげるという目的があります。

今年度の草焼きは1月21日に実施しましたが、その翌日には燃えた灰が強風で飛ばされることなく、地面で雨に打たれました。つまり、焼却灰の持つ栄養分が自生地に帰っていったといえるのです。



▲平成20年度の草焼きの様子

それでは、この焼却灰の中にはどれだけの栄養分が含まれているのでしょうか。そこで、草焼きの前に、オギ・ヨシ、つる性植物を2m×2mの区域で刈り取り、それを燃やして「灰」を作成、その分析を現在依頼しているところです。

### 田島ケ原のいきもの(No.2)

#### —ハンノキ—

まだ、雪のちらつくこともある2月中旬の田島ケ原は広々としていて、むき出しになった地面には草焼きで炭になったヨシやオギの残骸が突っ立っているばかりです。その頃、ハンノキは花盛りで、枝先には黄褐色の花穂がいっぱいぶら下がっています。ぶら下がっているのは雄花だけがたくさん集まった花穂で、この雄の花穂の後ろ側に立っている小さいのが雌の花穂です。この寒い時期には花粉を運んでくれる昆虫がいないので、花には昆虫を誘う蜜や香がないばかりか、花びらもありません。花粉はスギやイチョウのように風によって運ばれ、風が吹くと花粉は黄色い煙のように舞い上がります。

(さいたま市文化財調査専門員 磯田 洋二)



さくらそう通信 24号 平成21年3月31日

編集・発行 さいたま市教育委員会  
さいたま市浦和区常盤6-4-4  
☎048-829-1723 (文化財保護課)

「さくらそう通信」のバックナンバーはさいたま市のホームページでご覧いただけます。